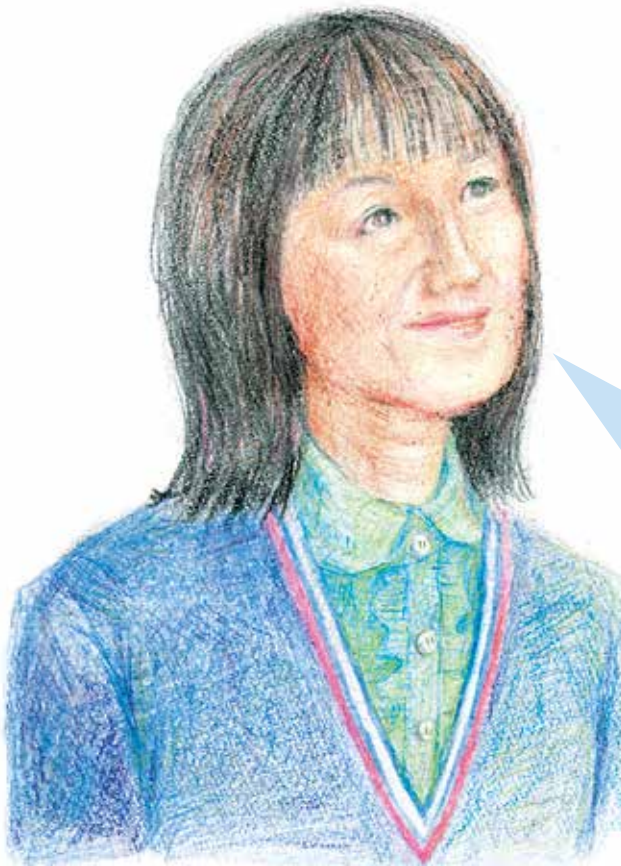


# 思いをつないだ先生たち

## 高校の修学支援担当の先生の話



「入学したいという意志が強かったのに断念しようとしていたんだな。」ということが入学式当日に分かった時「高校の役目を果たしていない。どうにかしなくちゃいけない。」という思いがありました。高校ってというのは小・中学校の義務制とは違って、行きたいと思っている人が行って学ぶ場だと思うんですね。やっぱり高校に行きたいと思う子がいるんだったら、高校はその子を受け入れてきちんと責任を持って支援していかななくてはいけないかなって。

2010年4月から授業料無償化が始まったときに、就学支援は個人の問題ではなくて社会全体の問題だから、国が支えていこうという動きの一つだろうなって思ったんです。この事例を美化せずに、今後そういうことが無いような取組みにつなげていかないといけないと思います。

## 英子さんの出身中学校の先生の話

「辞退…」あの朝の電話にはびっくりしました。「どうしてかな」理由が分からなかったから、聞きたい、知りたい気持ちでした。長年の経験の中で、初めて高校の入学式に来ないという連絡を受けて、こんなことがあっていいのかなという思いでした。入学まで決まっていた、真面目な子だったので入ったら最後まで続けるだろうという思いでした。しかし、厳しい家庭状況であったため経済的な相談をどうしても先生や他人には言えない、話せないことだったのかも知れません。

やはり、奨学金の予約募集(支度金)に漏れた家庭に対する配慮や声掛けをしていなかった取り組みの甘さがあったと実感しました。もっと早く気づいていれば、他に何かできたかも…と感じました。



## あの頃を振り返って、そして今…

### 英子(仮名)さんの話



誰かに相談しようとか全然、思いつかなかったです。中学校を卒業する時「何かあったら戻っておいで。」と言われていても、いざこういう立場になったときにちょっと恥ずかしいじゃないですか。高校の側は何もされてないだろうなと思っていたので、いろんな支援とかされているのを聞いて、ものすごくありがたいし、「これで高校も行けるようになった。」と思い、すごくうれしかったです。それで高校に通えて夢を追いかけることができたんです。

### 英子さんのお母さんの話

入学式の前日は他の子より何倍も悲しい思いをさせました。本当に一日中泣いていたんですよ。子どもを守ってやれてなくて、やっぱり親も苦しいんです。入学式は行けなかったけど、この子は恵まれていたなと思います。苦しい思いをさせたけど、逆にこんな先生たちと出会わせていただいて、この子にとって本当によかったと思います。そんな人たちに見守られて、まわりの人に常に感謝できる子に育っています。

